

学科 管理栄養士	所感 TP 作成を通して自身が行っている教育活動を振り返ることで、課題を明確にすることができたため、改善に取り組んで行きたい。
氏名 上島 寛之	

家政学部家政学科の教育目標は、本学の教育目標と教育方針の下、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神の実践を通して社会的に自立して生きていく上で必要な①スキル・リテラシー・教養等に関する一般的知識・技能と②家政に関する専門的知識・技能と③建学の精神・社会人基礎力・pisa 型学力を統合的に身に付け、社会に出てからは、これらの知識・技能をベースに生涯学習社会の中で自己の潜在能力をさらに開発しながら、職場と地域の課題解決に貢献できる人材を育成することである。

イ 家政学専攻の教育目標は、家政学部の教育目標の下、これからの社会の新しいライフスタイルのデザインを提案することによって、人々の日常生活を衣・食・住の面から支援することのできる人材を育成することである。

ロ 管理栄養士専攻の教育目標は、家政学部の教育目標の下、管理栄養士の資格を生かして、チーム医療、健康増進・疾病予防、食育・栄養指導又は健康をテーマにした食品の研究・開発等で活躍することによって、人々の日常生活を健康の面から支援することのできる人材を育成することである。

ハ こどもの生活専攻の教育目標は、家政学部の教育目標の下、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の資格を生かして、こどもたちの学力および社会性・社会力の基礎・基本を育てることによって、人々の日常生活を子育ての面から支援することのできる人材を育成することである。

1 教育の責任

私は家政学部家政学科管理栄養士専攻において、2020 年 3 月時点で 2 年間教鞭を振るってきた。その中で、2020 年度は、オムニバス科目を含めて 13 科目(すべて受講学生は管理栄養士専攻)を担当した。右の一覧表に示した科目は、管理栄養士を目指す学生が「地域や社会集団を対象とした栄養上の問題点把握と改善及び疾病予防」についての知識や技術を身に着ける科目である。卒業研究では地域住民を対象とした健康や栄養に関する事象についての研究に取り組んでいる。授業以外には学生指導、学生委員、臨地実習委員、国家試験対策委員、オープンキャンパス模擬授業などを担当した。	科目名	開講時期	受講者数	備考
	公衆栄養学Ⅰ	2 年後期	80	
	公衆栄養学Ⅱ	3 年後期	80	
	公衆栄養学実習	3 年前期	80	
	栄養実習事前・事後演習	3 年通年	80	公衆栄養・オムニバス
	地域栄養教育論	3 年後期	20	オムニバス
	地域栄養・食育政策論実習	4 年前期	20	オムニバス
	管理栄養士特論	3 年後期・4 年通年	80	公衆栄養・オムニバス
他 6 科目				

2 教育の理念と目的

情報機器および技術の普及・発達した現在において、名称独占である管理栄養士に「情報リテラシー」は非常に重要な能力であると考える。また管理栄養士は「人」と接する職業であると考える。このことから、膨大な情報の中から必要なものを科学的根拠に基づいて適切に取捨選択するだけでなく、地域住民などの相手に「伝える」ように整理・活用することのできる管理栄養士を養成したいと考えている。

3 教育方法

授業は「管理栄養士養成のための栄養学教育モデル・コア・カリキュラム」に基づき展開しているが、公衆栄養学の講義では、特に「内容の理解」と「知識の定着」着目して、以下のような授業方法を採用している。

①確認テスト(小テスト)と管理栄養士国家試験過去問の実施

前週の習熟度確認を目的として授業の開始 10 分で確認テスト(小テスト)の実施しており、小テストの結果から必要に応じて追加の解説を行うなど柔軟な対応を行っている。また、授業の終わりには授業の内容に沿った国家試験過去問を提示しており、授業の内容と管理栄養士国家試験がリンクしやすくなるように工夫している。

②PCR シートの採用

学生が学ぶ内容を整理しながら学修できるように PCR シートを採用している。 また、情報リテラシーの向上を意識して、PCR シート作成の際には教科書以外の情報の情報も得るように促しており、提出された PCR シートの内容に応じて指摘やディスカッションの題材に取り上げている。

③ディスカッションやロールプレイングなどワーク時間の設定

内容を理解するためには、教科書を丸暗記するのではなく、「自身の言葉で説明する」ことが近道であると考えている。また、一方的な情報の伝達よりも実際に学生同士でのディスカッションや発表は知識の定着に繋がると同時に相手に伝える工夫に取り組む練習になると考えている。また、PCR シートと同様に情報リテラシーの向上を意識してディスカッションの際にはスマートフォンの使用を許可しており、活発な議論が行われている。

4 授業改善の活動

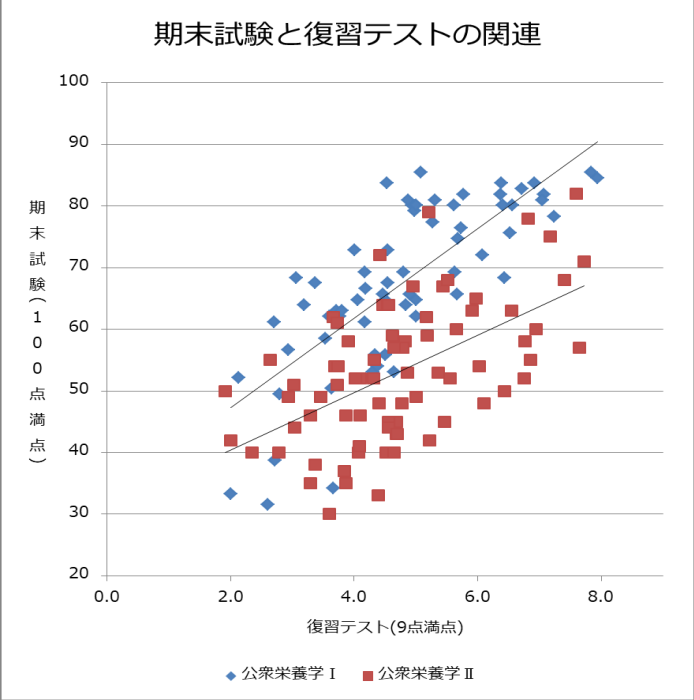
授業中には定期的に「声の大きさ」や「進行速度」などの確認を行っている。また共通で行われている大学授業評価アンケート(添付資料 1)だけでなく、初回と 7 回目(中間)の授業時に授業進行に関する独自のアンケート(添付資料 2)を実施しており、翌週にはその結果を授業内で学生に開示し、授業改善に努めている。さらに毎週行っている小テストの結果をもとに必要に応じて追加の解説を行うなど柔軟な授業運営を心掛けている。ほかには、FD 活動で行われている公開授業に積極的に参加し、自身の授業運営のあり方を見直し、改善を行っている(添付資料 3)。

5 学生の授業評価

2020 年度の授業評価アンケートの結果は添付資料の通りである(添付資料 4)。いずれの項目も比較的高い評価を得ており、学生は概ね授業運営に納得していることが伺える。この結果を踏まえ、2021 年度の授業ではさらに学生の反応や理解度を確認しながら授業展開をしていきたい。

6 学生の学修成果

2 年次(後期)開講の公衆栄養学Ⅰおよび 3 年次(後期)開講の公衆栄養学Ⅱにおける期末試験(100 点満点)と毎時間実施する復習テスト(毎週の内容を確認する小テスト(9 点満点))に着目した。Shapiro-Wilk normality test を用いて正規性を確認したところ、すべて 1 峰性であり、公衆栄養学Ⅰの期末試験を除き正規分布を示した。公衆栄養学Ⅰの期末試験はやや高得点寄りに偏った分布であった。期末試験を 10 点刻みに階級分けしたヒストグラムで確認したところ、公衆栄養学Ⅰでは 60 点台、公衆栄養学Ⅱでは 50 点台にピークが現れ、中央値は公衆栄養学Ⅰで 67.9 点、公衆栄養学Ⅱで 52.0 点であった。小テストを 1 点刻みに階級分けしたヒストグラムで確認したところ、公衆栄養学ⅠⅡどちらも 4 点台にピークが現れ、中央値は公衆栄養学Ⅰで 4.7 点、公衆栄養学Ⅱで 4.6 点であった。また、Smirnov-grubbs test を用いて外れ値を確認したが、公衆栄養学ⅠⅡどちらも外れ値は見受けられなかった。これは上記のような講義方法と改善策によるものとする。小テストは毎回の内容が異なるため、経時的な変化は確認できなかったが、期末試験との相関を確認したところ、公衆栄養学Ⅰでは、 $r=0.793$ 、公衆栄養学Ⅱでは、 $r=0.558$ であり、どちらも中程度以上の正の相関が確認されている。今回は横断的な学修成果の確認であり、また全体での評価のみである。今後は経時的な検討や分野ごとに分けた詳細な成果の検討を行っていく必要があると考えるが、日々の予習・復習が重要であることを改めて学生に周知する必要があると感じた。



7 授業科目に関連した教材開発

小テスト(添付資料 5)、ワークシート(添付資料 6)

8 指導力向上のための取り組み

愛知学泉大学家政学部が主催する FD 研修会に参加し、教育に関する課題を発見している。また、学会に参加することで最新の知識を取り入れ、得た知識を学生に還元している。

9 今後の目標

短期的な目標としては、公衆栄養学・栄養疫学について興味を持ってもらうことや必要性を感じてもらうために授業改善に努める。長期的な目標としては、学生が、ここで学んだ一つ一つのことが、管理栄養士となって役に立ったと思ってくれるような教育をしたい。

10 添付資料

- 添付資料 1：大学授業評価アンケート
- 添付資料 2：授業アンケート(初回・第 7 回実施分)
- 添付資料 3：授業観察記録/アンケート
- 添付資料 4：大学授業評価アンケート結果(リフレクションペーパー)
- 添付資料 5：小テスト(公衆栄養学ⅠおよびⅡ用)
- 添付資料 6：ワークシート(公衆栄養学実習用)